

令和4（2022）年度 全国学力・学習状況調査における 士別市の学力等の分析

【令和4年11月15日 士別市教育委員会（学校教育課）】

令和4年度の全国学力・学習状況調査は、令和4（2022）年4月19日が調査実施日でした。士別市（教育委員会）では、調査対象となる児童が在籍していない学校を除いた小学校5校、中学校4校で実施しました。

このたび、文部科学省国立教育政策研究所から「報告書」の提供を受け、今後の学習指導に反映させるため、士別市教育委員会として次のとおり分析結果をまとめました。

（調査問題および解答等につきましては国立教育政策研究所HPに掲載されています。）

1 調査の目的

国が示した本調査の目的は、次のとおりです。

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析することにより、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 本調査実施に関する士別市教育委員会の基本的な考え方

士別市教育委員会は、本調査の目的からその意義を認め、定められた方法に従って調査を実施しました。

- (1) 調査は、これまで各学校がそれぞれの計画に基づいて実施している標準学力調査などと同様に、通常の教育活動の一環として実施しました。
- (2) 調査結果は、学力の特定の一分野であり、本調査により測定できるのは、学校における教育活動の一側面に過ぎないことを踏まえる必要があります。そこで、学校の序列化や過度な競争につながらないように配慮する視点から、学校ごとの結果は公表はせず、士別市における学力傾向を明確化し、今後の授業改善等に資するために、士別市全体としての数値結果を公表します。
- (3) 教育委員会と各学校は、児童生徒の学力・学習状況のそれぞれの課題を把握・検証することによって、より適切かつ充実した教育活動の推進に努めます。

3 調査実施日 令和4（2022）年4月19日（火曜日）

4 調査対象 (1) 小学校 第6学年 (2) 中学校 第3学年

5 調査事項及び手法

(1) 児童生徒に対する調査

① 教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

出題内容はそれぞれ次の(ア)と(イ)を一体的に問うものです。

(ア) 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

(イ) 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査問題は学習指導要領（平成29年告示）に示された目標及び内容等に基づいて作成

② 質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

本年度の主な調査項目は以下のとおりです。

- ・挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等
- ・地域や社会に関わる活動の状況等
- ・ICTを活用した学習状況
- ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況
- ・学習に対する興味・関心や授業の理解度

(2) 学校に対する質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や（学校における）人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問紙調査を実施しました。

本年度の主な調査項目は以下のとおりです。

- ・生徒指導等
- ・学校運営に関する状況／教職員の資質向上に関する状況
- ・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況
- ・ICTを活用した学習状況
- ・各教科の指導方法
- ・個に応じた指導
- ・新型コロナウイルス感染症の影響

6 本市の参加状況

令和4年度の参加状況

	小学校		中学校		総 数	
	学校数 (校)	児童数 (人)	学校数 (校)	生徒数 (人)	学校数 (校)	児童生徒数 (人)
国 語	5	95	4	117	9	212
算数・数学	5	95	4	117	9	212
理 科	5	92	4	117	9	209

(本年度は、小学校1校に調査対象の児童が在籍していないため小学校は5校)

7 教科に関する調査の結果

令和4年度の調査結果

	平均 正答率	小学校			中学校		
		国語	算数	理科	国語	数学	理科
全 国	%	65.6	63.2	63.3	68.6	51.4	49.3
北海道	%	64	61	63	69	49	49
士別市	%	65	65	68	71	47	50

※平成29年度以降文部科学省からは、小数点以下が四捨五入されたデータが
都道府県及び各市町村に提供されています。

8 士別市の学力調査の結果

(1) 全体として

士別市全体として、小学校では、全道の平均正答率〈以下「全道平均」と表記〉を国語・算数・理科ともに上回り、全国の平均正答率〈以下「全国平均」と表記〉に対して国語がほぼ同程度で、算数・理科は上回りました。

中学校では、国語・理科においては全道・全国平均ともに上回りましたが、数学においては全道平均から2ポイント、全国平均からは4ポイント程度下回る結果となりました。

参考値として令和3年度の調査データを掲載しています。(理科については未実施)また、令和4年度の中学3年生は、平成31(令和元)年度の小学6年生時において本調査を受けていることから、次頁に参考値として当時の調査データを掲載しています。

【令和3年度調査と令和4年度調査の結果比較（小学校）】

	平均 正答率	小学校（国語）		小学校（算数）	
		R3	R4	R3	R4
全 国	%	64.7	65.6	70.2	63.2
北海道	%	63	64	67	61
士別市	%	64	65	70	65

【令和3年度調査と令和4年度調査の結果比較（中学校）】

	平均 正答率	中学校（国語）		中学校（数学）	
		R3	R4	R3	R4
全 国	%	64.6	69.0	57.2	51.4
北海道	%	65	69	56	49
士別市	%	64	71	53	47

【H31年度の小学6年生とR4年度の中学3年生を比較】

	平均 正答率	H31年度の小学6年生		R4年度の中学3年生	
		国語	算数	国語	数学
全 国	%	63.8	66.6	69.0	51.4
北海道	%	63	64	69	49
士別市	%	64	64	71	47

(2) 小学校の調査問題

①【国語の結果】

本年度の調査結果は、令和3年度の調査と同様に全道平均をやや上回り、全国平均とほぼ同等となりました。本年度の（学習指導要領）領域別の正答率では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事柄」で、全国・全道平均を上回っていますが、「話すこと・聞くこと」「書くこと」で全国平均を下回り、「読むこと」では全国・全道平均を下回りました。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全 国
言葉の特徴や使い方に関する事項	70.5	68.7	65.6
我が国の言語文化に関する事柄	85.3	75.9	77.9
話すこと・聞くこと	65.8	63.7	66.2
書くこと	47.9	47.4	48.5
読むこと	61.1	65.2	66.6

問題別では、複数の条件を満たすよう指定された記述式問題の正答率が低い傾向があり、課題となっています。記述式問題の無解答については、全国・全道平均と比較して若干高い傾向が見られます。

②【算数の結果】

令和3年度の調査では、全国平均とほぼ同等でしたが、本年度調査結果は全国平均を2ポイント程度上回っています。

本年度の（学習指導要領）領域別では、「数と計算」「図形」「データの活用」で全国・全道平均を上回っていますが、「変化と関係」の領域では全国平均を若干下回っています。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
数と計算	73.0	67.7	69.8
図形	66.3	62.5	64.0
変化と関係	51.1	48.3	51.3
データの活用	69.5	66.1	68.7

問題別では、具体的な数処理や数学的な思考ではなく、日常生活経験で正解を導き出せる問題の正答率がよくありませんでした。（例：「飲み物の量を半分にしたときの含まれている果汁の割合」を問う問題の正答率が25.3%）

無解答については、全国・全道平均と比較して低い傾向にあるものの、理由を説明する問題等で割合は高くなっています。

③【理科の結果】

前回（平成30年度）理科の調査では、全道・全国平均をやや上回りましたが、本年度調査結果は全道・全国平均を5ポイント程度上回っています。

本年度の（学習指導要領）領域別では、全領域ともに全国・全道平均を上回っています。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
「エネルギー」を柱とする領域	56.3	51.2	51.6
「粒子」を柱とする領域	69.3	60.4	60.4
「生命」を柱とする領域	76.3	74.1	75.0
「地球」を柱とする領域	67.8	64.1	64.6

問題別では、どの問題もよくできていますが、自分の考えをまとめて書く記述式の問題の正答率が低く、他の問題に比べて無解答率が高くなっています。

(3) 中学校の調査問題

①【国語の結果】

本年度の調査結果は、全道平均・全国平均を上回りました。下表に本年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示しました。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全 国
話すこと・聞くこと	65.2	63.5	63.9
書くこと	45.3	44.5	46.5
読むこと	71.8	67.3	67.9
言葉の特徴や使い方に関する事項	73.9	72.1	72.2
情報の扱い方に関する事項	45.3	44.5	46.5
我が国の言語文化に関する事項	71.2	69.3	70.2

領域別では、全ての領域で全道平均を上回っていますが、「書くこと」「情報の扱い方に関する事項」で1ポイント程度全国平均を下回りました。

問題別では、他の問題に比較して「自分の考えがわかりやすく伝わる文章」「根拠を明確にして書く」等の記述式の問題や「行書の特徴」を選択する問題の正答率が低くなっています。

無解答率については、全国・全道平均と比較して低い傾向にありますが、記述式の問題において無解答率が非常に高くなっています。

②【数学の結果】

本年度の調査では、全道平均から2ポイント、全国平均からは4ポイント程度下回っています。下表に本年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示しました。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全 国
数と式	49.2	52.0	57.4
図 形	33.9	43.0	43.6
関 数	40.5	42.3	43.6
データの活用	62.1	56.5	57.1

領域別では、「データの活用」の問題で全国・全道平均を上回っていますが、他の3つの領域では全国・全道平均を下回っています。

問題別では、「連立方程式を解く」問題や「ふたを投げたときに下向きになる確率を選ぶ」問題について正答率が高く、全道・全国を上回っています。しかし、数学的に説明する問題や図形の証明などの記述式問題では正答率が低く、無解答率が高くなっています。（例 9(2)の証明問題では、正答率7.7、無解答率34.2）

③【理科の結果】

本年度の調査結果は、全道平均・全国平均を上回りました。下表に本年度の（学習指導要領）領域別の正答率を示しました。

学習指導要領の内容	士別市	北海道	全国
「エネルギー」を柱とする領域	42.0	41.9	41.9
「粒子」を柱とする領域	52.8	51.2	50.9
「生命」を柱とする領域	59.0	56.8	57.9
「地球」を柱とする領域	45.6	43.6	44.3

領域別では、4つの領域ともに全道・全国平均を上回っています。

問題別では、「化学反応式」の問題や「実験操作の組合せを選択」する問題について正答率が高く、全道・全国を上回っています。国語・数学に比べ、「実験の結果を基に考察をまとめる」等の記述式問題への無解答率が非常に低くなっています。

（例 8(3)生物Xが昆虫類かどうかを記述する問題の正答率45.3、無解答率2.6）

9 学習状況調査の結果〈児童生徒質問紙〉

学習状況調査については、文部科学省が「報告書」において経年変化を比較分析しています。その中で、本年度調査において顕著な傾向が見られる質問項目について、本市の結果を抜粋し、全国平均と比較しながら分析しました。また新たに加わった質問項目についても分析を加えました。

(1) 基本的な生活習慣等（全6項目）

- ①「普段（月曜日から金曜日）、テレビゲーム（携帯式のゲームやスマートフォンを使ったゲームも含む）をする」時間は、調査開始年度に比べて増加傾向にあります。本年度の調査では、「2時間以上」と回答している本市の児童生徒の割合は約6割であり、ともに全国平均よりも高くなっています。
- ②（本年度新たに加わった項目で）「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）」に対して、本市の児童生徒の2割程度が「4時間以上」と回答し、ともに全国平均よりも高くなっています。
- ③他の項目については、調査開始年度と比較して大きな変化は見られず、全国平均とほぼ同じ傾向にあります。

(2) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等（全12項目）

- ①「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対する回答は、調査開始年度と比べて若干の増加傾向にあり、本市では小学生が98%と全国平均より高くなっていますが、中学生が76%と、全国平均よりも低い状況にあります。
- ②（本年度新たに加わった項目）「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」に対する回答は、全国平均とほぼ同じ割合でした。（小学生74%・中学生63%）
- ③他の項目については、調査開始年度と比べて大きな変化は見られません。

(3) 学習習慣、学習環境等（全8項目）

- ①平日の学習時間について、「1時間以上勉強をしている」と回答した本市の児童生徒は微増傾向にあり、小中学生ともに全国平均と大きな差はありません。しかし、「2時間以上勉強をしている」と回答した割合では、小学生は14%、中学生は13%と全国平均（小学生25%、中学生35%）よりもかなり低くなっています。
- ②「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たり1時間以上勉強をしている（学習塾や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」と回答した本市の小学生の割合は66%で全国平均（56%）より高く、中学生は63%で全国平均（71%）よりも低くなっています。
- ③（本年度新たに加わった項目）「家で学校からの課題で分からないことがあった

とき、どのようにしていますか（複数選択）」との問いに対する本市小学生の回答は、「家族に聞く（81%）、自分で調べる（76%）、友達に聞く（64%）」に対して、中学では「自分で調べる（88%）、友達に聞く（76%）、先生に聞く（44%）」の順となっています。

④他の項目については、調査開始年度と比べて大きな変化は見られません。

(4)地域や社会に関わる活動の実施状況等（全5項目）

①「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて増加傾向にあります。小学生の全国平均が52%であったのに対し、本市では58%、中学生は全国平均の41%に対し、本市では36%となっています。

②「今住んでいる地域の行事に参加している」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて近年はやや減少している状況にあります。小学生の全国平均が53%であったのに対し、本市では64%、中学生は全国平均の40%に対し、本市では37%となっています。

③（本年度新たに加わった項目）「自然の中で遊ぶことや自然観察をすることがありますか」においては全国平均とほぼ同程度で、小学生で7割、中学生で5割程度となっています。

④（本年度新たに加わった項目）「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか（複数選択）」に対する本市の小学生の回答は「家でTV、ゲーム、動画、SNS（89%）、家族と過ごす（75%）、友達と遊ぶ（65%）」に対して、中学生の回答は「家でTV、ゲーム、動画、SNS（95%）、部活動に参加（69%）、家族と過ごす（62%）」の順となっています。

(5)ICTを活用した学習状況（全6項目）

①「授業でコンピュータなどのICT機器を週1回以上使用している」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度と比べて大幅な増加傾向にあります。小学生の全国平均が83%であるのに対して、本市では87%、中学生は全国平均の81%に対して、本市では95%となっています。

②本年度、新たに調査した内容については次のとおりです。

質問項目		全国	士別市
学校で授業中に自分で調べる場面でICT機器をどの程度使っていますか（週1回以上の割合）	小学生	76%	81%
	中学生	72%	89%
学校で学級の生徒と意見を交換する場面でICT機器をどの程度使っていますか（週1回以上の割合）	小学生	49%	69%
	中学生	49%	63%
学校で自分の考えをまとめ発表する場面で、ICT機器をどの程度使っていますか（週1回以上の割合）	小学生	45%	39%
	中学生	45%	39%

③他の項目については、調査開始年度と比べて大きな変化は見られません。

(6)主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況（全7項目）

①「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と回答した児童生徒の割合は、調査開始年度に比べて増加傾向にあります。小学生の全国平均は80%であるのに対して、本市では91%、中学生は全国平均が80%であるのに対して、本市では79%となっています。

②本年度、新たに調査した内容については次のとおりです。

質 問 項 目		全 国	士 別 市
小学5年生（中学2年生）までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか	小学生	67%	67%
	中学生	72%	77%
小学5年生（中学2年生）までに受けた授業では、自分の思いや考えをもとに、作品や作文など新しいものを創り出す活動を行っていましたか	小学生	80%	88%
	中学生	67%	63%

③調査開始年度から設定している他の項目については、大きな変化は見られません。

(7)総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳（全4項目）

①「総合的な学習の時間で、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」「学級で学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」と回答した児童生徒は、調査開始年度と比べて増加傾向にあります。小学生の全国平均が73%であるのに対して、本市では85%となっており、中学生では全国平均の72%に対して、本市では74%となっています。

②「道徳の授業では自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」と回答した小学生の割合については、特に大きな変化はなく、中学生では増加傾向にあります。小学生の全国平均が80%であるのに対して、本市では90%となっており、中学生では全国平均の86%に対して、本市では88%となっています。

③他の項目については、調査開始年度と比べて大きな変化は見られません。

(8)学習に対する興味・関心や授業の理解度等（国語、算数・数学、理科 全21項目）

①各教科に対する興味・関心、等

「教科の勉強が好きですか」				
		国 語	算数・数学	理 科
小学生	全国	58%	63%	80%
	士別	59%	68%	79%
中学生	全国	62%	58%	66%
	士別	65%	55%	64%

「教科の勉強は大切だと思いますか」				
		国 語	算数・数学	理 科
小学生	全国	93%	94%	87%
	士別	97%	97%	88%
中学生	全国	93%	87%	77%
	士別	88%	90%	78%

「授業の内容はよくわかりますか」				
		国 語	算数・数学	理 科
小学生	全国	84%	81%	89%
	士別	89%	84%	92%
中学生	全国	81%	76%	75%
	士別	78%	68%	68%

「授業で学習したことは将来、社会に出て役に立つと思いますか」				
		国 語	算数・数学	理 科
小学生	全国	91%	93%	77%
	士別	100%	97%	73%
中学生	全国	90%	77%	62%
	士別	89%	75%	60%

②各教科の解答時間について

「解答時間は十分でしたか」				
		国 語	算数・数学	理 科
小学生	全国	66%	84%	91%
	士別	54%	79%	87%
中学生	全国	85%	71%	93%
	士別	82%	64%	97%

10 学習状況調査の結果〈学校質問紙〉

各学校長が自校の学習状況調査について回答する「学校質問紙」については、昨年に引き続きwebシステム上で直接入力する形で実施されました。質問項目は前年度よりやや減り、本年度の調査では次の16分類（全105項目）で実施されました。

- 1 生徒指導等(全5項目)
- 2 学校運営に関する状況／教職員の資質向上に関する状況(全15項目)
- 3 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況(全10項目)

- 4 総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科 道徳の指導方法(全4項目)
 - 5 学習評価(全2項目)
 - 6 国語の指導方法(全6項目)
 - 7 個に応じた指導 (全3項目)
 - 8 算数・数学科の指導方法(全4項目)
 - 9 理科の指導方法(全6項目)
 - 10 ICTを活用した学習状況(全16項目)
 - 11 特別支援教育(全1項目)
 - 12 小学校教育と中学校教育の連携(全3項目)
 - 13 家庭や地域との連携(全6項目)
 - 14 家庭学習(全3項目)
 - 15 全国学力・学習状況の結果等の活用(全3項目)
 - 16 新型コロナウイルス感染症の影響(全23項目)
- * 学校規模（学級数、児童生徒数、教職員数、等）について（全6項目）

本年度の学校質問紙調査において、全国平均と本市の結果を比べて顕著な相違や、士別市の小学校と中学校で差が見られる質問項目について下表に示しました。

質 問 項 目		全 国	士別市
調査対象学年の児童生徒は、授業中の私語が少なく、落ち着いてい ると思いますか	小学校	42%	60%
	中学校	65%	50%
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、将来就きたい仕 事や夢について考えさせる指導をしましたか	小学校	20%	40%
	中学校	51%	75%
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学校生活の中で、 児童生徒一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する（褒めるなど） 取組を行いましたか	小学校	59%	100%
	中学校	55%	100%
指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的 物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に 組み合わせていますか	小学校	32%	60%
	中学校	23%	50%
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、習得・活用及び 探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか	小学校	21%	60%
	中学校	21%	75%
調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、児童生徒のよい 点や改善点等を積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感 できるようにしましたか	小学校	39%	60%
	中学校	36%	100%
調査対象学年の児童生徒に対する理科の指導として、前年度までに、 自ら考えた仮説をもとに、観察、実験の計画を立てることができる ような指導を行いましたか	小学校	31%	80%
	中学校	24%	25%
調査対象学年の児童生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場 面では、児童生徒一人一人に配備されたP C ・タブレットなどのI C T機器を（ほぼ毎日）使用させていますか	小学校	58%	80%
	中学校	15%	75%
令和3年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対 象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために 活用しましたか	小学校	30%	60%
	中学校	24%	100%

* 各％は「そう思う」「よく行った」等、第1番目の回答を選んだ割合

11 まとめと課題

本年度調査の問題数は、小中ともに国語が14題、小学算数は16題、小学理科は17題、中学数学が14題と前年度調査（理科は前回実施H30年度）と大きく変わっていません。中学理科は21題と、前回実施H30年度の27題から減っています。国語、算数・数学、小学理科の問題1題当たりの正答率ポイントは6～7ポイント程度、中学理科においては3～4ポイント程度と計算することができます。全ての教科において、土別市の児童生徒は、全国平均の正答数±1題の範囲となっています。

小学生では、国語が全国平均と同程度、算数と理科は全国平均を上回り、良好な結果を得ていますが、学校間で若干の差が見られるところであり、今後は教材や練習問題、家庭学習の課題データ等の共有や、1人1台端末の効果的な活用などに向けて、Google Classroomやクラウドの活用を一層推奨します。また、説明や理由を書く問題の正答率や無解答率は、全国的な傾向と同様に課題となっており、今後の学力調査等で活用されるCBT化に対応するためにも、自分の考えをまとめ「PCを活用した」記述をする学習と「筆記具を使った」記述をする学習の両面を各教科において工夫する必要があります。

中学生では、国語と理科において全国平均を上回っていますが、数学においては全道平均から2ポイント、全国平均からは4ポイント程度下回っています。特に領域別では、「図形」の学習に課題があります。問題別では、「説明や証明を書く」問題の正答率や無解答率が継続的な課題となっています。数学における苦手意識を払拭するとともに、数学検定に挑戦するなど、意欲的に取り組ませたい領域と考えられます。

「児童・生徒質問紙」「学校質問紙」による学習状況の調査については、質問項目が毎年見直され、昨年度からICTを活用した学習状況や新型コロナウイルス感染症の影響等の項目が数多く設定されています。

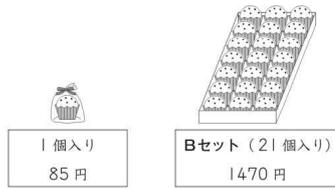
本市の児童生徒は、全国平均に比べてPCゲームやSNS、動画視聴でスマートフォン等を使用する時間が長く、平日3時間以上の利用者が30%程度を占めています。家庭学習については、本市の小学生と中学生が同程度の時間数となっており、全国平均を下回っています。特に中学生の「2時間以上」では、全国平均との差が大きくなっています。前年度調査と同様に、中学3年生としては家庭学習の時間が不足しているものと考えられます。

授業でのICT機器の活用について、本市では、全国平均に比較して小中ともにその利用度は高くなっています。特に中学校では、前年度調査に比べても増加しています。

「学校質問紙」については、小学校5校、中学校4校と調査母体数が少ないため、前年度調査と同様に、質問項目毎のパーセンテージは参考値として把握し、今後、各学校の学力調査と児童生徒質問紙のクロス集計等の分析から、授業改善等に反映することを期待します。

(4) カップケーキが1個入り85円でも売られています。
くるみさんは、1個入り85円のカップケーキ21個分の値段と、Bセット
1箱分の値段である1470円を比べることにしました。

図②



1個入り85円のカップケーキ21個分の値段は、 85×21 で求めることができます。



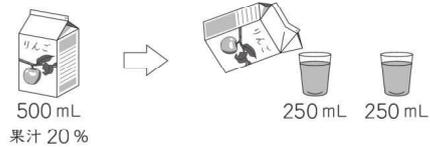
くるみ 85×21 の答えが1470より必ず大きくなることは、 85×21 をそのまま計算せずに、85と21をがい数にして計算してもわかります。

85×21 の答えが、1470より必ず大きくなるのがわかるためには、「85」と「21」をどのようにがい数にして計算するとよいですか。
下のアからエまでの中から1つ選んで、その記号を書きましょう。

- ア 85を小さくみて80、21を小さくみて20として計算します。
- イ 85を小さくみて80、21を大きくみて30として計算します。
- ウ 85を大きくみて90、21を小さくみて20として計算します。
- エ 85を大きくみて90、21を大きくみて30として計算します。

(3) りんごの果汁が20%ふくまれている飲み物が500 mLあります。
この飲み物を2人で等しく分けると、1人分は250 mLになります。

図③



250 mLの飲み物にふくまれている果汁の割合について、次のようにまとめます。

250 mLは、500 mLの $\frac{1}{2}$ の量です。

このとき、

上のアにあてはまる文を、下の1から3までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になると、果汁の割合も $\frac{1}{2}$ になります。
- 2 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になると、果汁の割合は2倍になります。
- 3 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になっても、果汁の割合は変わりません。

また、図③の問題も同様に本年度の算数の問題です。「飲み物の濃さは半分の量でもは変わらない」といった生活経験の中で解答を導き出せる問題とも思えるものですが、本市児童の正答率は25.3%でした。

中学数学では、基礎基本の定着が課題といえます。図④は本年度の調査問題です。(領域は中1「数と式」)本市生徒の正答率は20.5%、無解答率は11.1%という結果になっています。既習内容の振り返りの大切さを感じさせる出題でした。

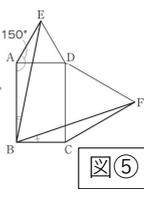
1 42を素因数分解しなさい。 図④

中学数学の証明問題への苦手意識払拭は、調査開始年度以来の課題となっています。図⑤は本年度調査問題ですが、調査の全教科中で最も正答率が低く、本市生徒は7.7%、無解答率は34.2%という結果でした。

琴音さんの考え

◇ $\angle EBF$ について、
 $\angle ABC = 90^\circ$ より、
 $\angle ABE + \angle CBF = 30^\circ$ がいえれば、
 $\angle EBF = 90^\circ - 30^\circ$ となり、
 $\angle EBF$ が 60° になることがいえる。

◇ $\angle ABE + \angle CBF = 30^\circ$ になることは、 $\triangle ABE \cong \triangle CFB$ からわかる等しい角と、
 $\angle EAB = 150^\circ$ を用いて示すことができる。



図⑤

$\angle ABE + \angle CBF = 30^\circ$ を示すことで、長方形ABCDの辺の長さを変えても、 $\angle EBF$ の大きさがいつでも 60° になることが説明できます。琴音さんの考えの◇にある $\triangle ABE \cong \triangle CFB$ と $\angle EAB = 150^\circ$ はすでにわかっていることとして、 $\angle ABE + \angle CBF = 30^\circ$ になることを下の説明の□に示し、 $\angle EBF$ の大きさがいつでも 60° になることの説明を完成しなさい。

理科については、本市の小学生・中学生はともに全道平均・全国平均を上回りました。小学理科において本市児童の正答率は約7割であり、全体的に理解できているといえます。正答率の低かった問題として、図⑥光の問題（「エネルギー」を柱とする領域）があります。

3 たかしさんたちは、晴れた日に科学クラブで、同じ大きさの鏡を使い、日光をはね返して、的^めあてゲームをしました。

図⑥

上の図のように、3人とかべの間に、それぞれ、円形、三角形、四角形に切りぬいた、鏡と同じ大きさの段ボールの板を置きました。

(1) 3人が上の図の位置で鏡の向きを変え、それぞれが日光をはね返して、3つの段ボールの板にあてたときに、かべの左にある的^め、三角形の光をあてることができるのはだれですか。下の 1 から 4 までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。

1 たかしさん
2 はなこさん
3 かつやさん
4 全員

本市児童の正答率は本調査（理科）で最も低く、34.8%でした。日常生活の中で「光が直進する」ことは理解しているが、この問題の設定である「自分の持っている鏡で光を反射させ、△の穴を通して的に当てることのできる位置を求める」という題意を読み取ることができなかった児童が多かったようです。

中学理科では、図⑦バネの問題（「エネルギー」を柱とする領域）の正答率が最も低く、11.1%でした。力が働いている様子を選ぶア～エの選択と、働いている力を説明しているカ～ケの選択を組み合わせで解答する問題でした。

(1) 図2のように、ばねにのせたおもりが静止したとき、矢印で表したおもりにはたらく重力とつり合う力を、下のアからエまでの中から1つ選びなさい。また、選んだ力の説明として適切なものを、下のカからケまでの中から1つ選びなさい。

図2 おもりにはたらく重力

ア イ ウ エ

カ おもりがばねを押す力 キ ばねがおもりを押す力
ク おもりが床を押す力 ケ 床がおもりを支える力

図⑦

今後の学習に向けては、これまで同様に国語科だけではなく、全ての教科で自分の考えや意見をまとめて書く作業（1人1台端末の活用を含む）や、まとめた内容を発表する機会を作ることが大切です。また、実験・観察したことと実生活の事象を結びつけて考えること、利用できることを見付けさせることが必要です。さらに語句の意味や定義等の基礎基本の定着は必須といえます。

(2) 授業改善のヒント

【国語の学習】

- ①「読むこと」と「書くこと」をリンクした学習
 - ・様々な文種（歴史、科学、小説、評論、報道、取説…）の文章を読む機会を持たせ概要を要約する、1人1台端末で図示する、などの学習
- ②「書くこと」と「話すこと」をリンクした学習
 - ・日常的に自分の考えを簡単にまとめて書いたものや、1人1台端末に図示したものをしながら要領よく話す、などの学習
- ③実践的に敬語を使う場面や経験を設定した学習
 - ・地域学習や社会見学等で、目上の人と話す機会を設定するなど
- ④語彙量の不足を補う学習
 - ・1人1台端末を活用し、日常使っている言葉や、テレビ・雑誌等で目や耳にした言葉の漢字表記や正しい意味や用法を知る

*特に中学校ではこれらの学習に加え次の3点を加えます。
- ⑤漢字の表記や字形に気を配り、読みやすい文章を書く練習
 - ・読み手が読みやすい文章を書く、敬語を使って文章を書く、などの練習
- ⑥国語便覧を活用する学習
 - ・国語的な基礎知識の習得（文学史、故事成語、四字熟語…）
- ⑦授業で使用しているワークブックや学力テスト等の過去問題の反復学習
 - ・授業で間違えた部分やできなかった部分の直し
 - ・複数の条件を満たし正答となる問題への対応

【算数・数学の学習】

- ①問題で何が求められているのか、読み取る力を高める
(答えを求めているのか、立式をなのか、求め方を説明するのか…)
- ②下学年の問題を文章化や資料化した問題の練習
- ③図形の問題では、問題の図を「90度、180度と回転させて見る」「補助線を引く」など1人1台端末で視点を変えて見る工夫
- ④記述問題への苦手意識の払拭
 - ・授業の中で、計算や立式、答えのみではなく、「解法の道筋やヒントを板書する」→「ノートにまとめさせる」などの書く学習場面をつくる
 - ・家庭学習に、解法の思考過程を記述する課題を出す

*特に中学校ではこれらの学習に加え次の2点を加えます。
- ⑤証明問題への取組
 - ・無解答率ゼロをめざす指導方法の工夫
 - ・段階的に記述する量を増やす（穴埋め、簡条書き、文章化…）
- ⑥教科書の章末問題や授業で使用するワークブックの問題、文教版学力テスト、等の直し

【理科の学習】

※理科の学習は、国語や算数（数学）のように積み重なって習得する内容よりも単元によって全く異なる内容が多いので、単元の学習の性質を児童生徒に理解させることが必要です。今回の調査結果では小学生、中学生ともに「エネルギー」を柱とする領域の授業の見直しが必要です。

①ICT機器の効果的な活用

- ・単元で出た新しい語句や名称、意味内容の定着や深化に1人1台端末を活用
- ・実験や観察の様子を写真で記録、整理に1人1台端末を活用

②興味や意欲を持たせる授業の導入の工夫と、単元テストによる定着

*特に中学校ではこれらの学習に加え次の点を加えます。

③中学生の苦手分野とされる「天気」「電気」「化学反応」「イオン」等の分野では、生徒の実態に合わせ、高校入試に向けた既習事項の反復と定着を工夫

【その他】

①データと、他のデータをつないで思考する学習の工夫

②教科や単元を横断的（または縦断的）に行う学習の工夫

【学校質問紙調査と児童生徒質問紙調査の整合性】

前年度調査で見られた学校質問紙と児童生徒質問紙において問題点としてきた質問項目について、本年度の調査結果を比較しました。

①授業での自主的な課題解決

「当てはまる・やや当てはまる」と答えた士別児童生徒・学校		R3年度	R4年度
・「(5年生までの・中学1～2年までの)授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」	児童質問紙	84%	86%
	生徒質問紙	83%	80%
	学校質問紙(小学校)	67%	100%
	学校質問紙(中学校)	100%	100%

*R3年度に見られた小学校と中学校の学校側の差は見られなくなりました。また、学校の評価に比べて児童生徒の自己評価は厳しめといえます。

②学習の深化・発展

「当てはまる」と答えた士別児童生徒・学校		R3年度	R4年度
・「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」 (学習過程を見通した指導方法の改善工夫)	児童質問紙	40%	46%
	生徒質問紙	33%	27%
	学校質問紙(小学校)	33%	60%
	学校質問紙(中学校)	75%	75%

*児童生徒の自己評価に比べて学校の指導に対する評価が高い傾向があり、特に中学校ではその傾向が顕著といえます。

③自己有用感

「当てはまる」と答えた土別児童生徒・学校		R3年度	R4年度
・「自分には、よいところがあると思いますか」 (一人一人のよい点や可能性を見つけ評価)	児童質問紙	28%	48%
	生徒質問紙	32%	35%
	学校質問紙(小学校)	83%	100%
	学校質問紙(中学校)	100%	100%

* 児童生徒の自己評価に比べ、学校の指導に対する評価が高い傾向があり、学校の取組が児童生徒の変容に結びついていないといえます。

④将来の夢や目標

「当てはまる」と答えた土別児童生徒・学校		R3年度	R4年度
・「将来の夢や目標を持っていますか」 (将来就きたい仕事や夢について考えさせる 指導をしましたか)	児童質問紙	33%	65%
	生徒質問紙	75%	33%
	学校質問紙(小学校)	33%	40%
	学校質問紙(中学校)	100%	75%

* 令和3年度と同様の傾向が見られるなかで、特に令和4年度の生徒の数値の落ち込みが気になります。小学校では引き続きキャリア教育の充実が求められます。

【「小学生の学習」と「中学生の学習」の違い】

前年度調査で見られた児童質問紙と生徒質問紙において顕著な差が見られた質問項目について、本年度の調査結果を比較しました。

①学習の計画性

「よくしている」と答えた土別児童生徒		R3年度	R4年度
・「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか (学校の授業の予習や復習を含む)」	児童質問紙	41%	31%
	生徒質問紙	16%	14%

* 全国平均からみても、中学生は小学生よりも計画性が低くなっていますが、昨年度調査と同様に、本市ではより顕著にその傾向がみられます。今後も中学生の家庭学習の指導に工夫が必要です。

②学習時間

「学校の授業時間以外に、普段1日当たりどれくらい学習しているか」		R3年度	R4年度
・「1時間以上学習している」と答えた割合	児童質問紙	58%	52%
	生徒質問紙	65%	61%
・「2時間以上学習している」と答えた割合	児童質問紙	12%	14%
	生徒質問紙	15%	13%

* 普段(月曜日から金曜日)の家庭学習については、今後も引き続き、学校での指導の工夫と家庭への啓発に努めることが必要と考えられます。

13 おわりに

学校における学習内容については、昨年度同様に各学校が全道・全国の調査結果を踏まえ、本市の分析を参考に、自校の結果を細かく見直し、授業の工夫・改善によって児童生徒に身に付けたい力や抜け落ちている力を補って行かなければなりません。

家庭学習については、全道・全国平均を大きく下回っているところであり、引き続き家庭の協力を得て、平日の児童生徒の家庭学習を促す必要があります。また、1人1台端末の活用については、本市独自のICT研修等を通して、教職員のスキルアップを図り、徐々に授業改善に活かされています。今後は、別室登校など不登校傾向の児童生徒の学習環境向上や、小学生のキャリア教育の充実など、さらにICT機器の効果的活用を進めることが必要です。

教育委員会は引き続き各校との連携を深め、学校教育の充実を図るとともに、「土曜子ども文化村」や「チャレンジ寺子屋」などの社会教育事業の発展的継続や家庭教育支援事業などの工夫に努め、生涯学習の観点からも子どもたちの「生きる力」を育む学びを推進します。